

古典籍目録作成の情報源

－ 書名・巻数の処理 －

和漢古典籍研究分科会

駒澤大学図書館	松下 賢
成城大学図書館	高島 みなみ
鶴見大学図書館	堀 はな恵
立正大学図書館	田中 麻巳

1. はじめに

和漢古典籍研究分科会は日本・中国、朝鮮半島で刊行された古典籍資料に対し、大学図書館員として必要な知識と書誌作成に関する技能の習得を目的としている。

今期は月例会で行なっている調書作成に際し、対応に戸惑う事例があったことから、研究テーマを「古典籍目録作成の情報源」に設定し、書誌作成時において注意すべき事例の対応策を検討した。それに先立ち、各図書館での対応、研究者の主張等を調査した。

2. 問題の所在

書誌作成に際し、当然ながら各項目の調査が必要となる。特に書名はより重視される項目であり、堀川貴司氏は「書名はその書物を特定し、また同一のテキストを持つ伝本群を一括する(同定)するための最も重要な目印ですから、慎重に正確に判断する必要があります。」と述べている(堀川2010)。実際古典籍の整理調査で、資料からの書名情報が多すぎたり、逆に少なすぎたり、あるいはまったく情報が得られない場合もある。

また巻数においても、「書物の系統を考察する上で大きな手がかりになる、巻数で大よそのボリュームを推測可能」といったことが指摘されているほか、NIIにおいても「物理的数量と巻数を区別

して表示する」としているもので、軽視できない書誌項目である。資料によっては巻数表示に画一性が少ないために、慎重に観察する必要がある。

以上から、書誌作成にあたり我々がたびたび頭を悩ませてきた問題及びその処理に関して、「古典籍目録作成の情報源-書名・巻数の処理-」を今期研究テーマとした。そして今後の書誌作成の一助となるような提案ができないか、検討の成果を報告することにした。

3. 考察の範囲と分析方法

さて、書誌作成時に処理に悩む事例を解消する端緒を探るために、はじめに各研究者が主張する意見や、主な研究機関で使用している書誌作成マニュアル等を精査した。それと並行して、大学図書館で古典籍資料に対し目録作成のためのマニュアルの有無や処理に悩む事例にどのように対応しているか等、いくつかの項目を設定してアンケートをお願いした。ご協力いただいた図書館の皆さまには、この場を借りてお礼を申し上げる。

なお、今回考察をするにあたり、和本の刊本を中心として取り扱った。漢籍においては長澤規矩也氏、京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター(以下、京大人文研)らの方法により共通の認識を得られること、写本については今回の刊本での当てはめられる可能性が高いことから、考

察の対象から除外した。

始めに、アンケートの設問項目について大学図書館の回答、研究者の主張等を確認していきたい。アンケートの詳細については、当分科会 HP に報告時の各種資料を掲載しているので、そちらを参照いただきたい。なお、回答内容には各図書館独自のものが含まれる場合もあるので、回答校の名称は伏せることにした。また参照した研究者の主張については、参考文献で確認いただきたい。

まずは「書名」に関する項目である。「書名」については、いくつか想定される事例に対してどのように対応されるか、質問している。結果としては、書名情報として「内題」を採用する図書館が多かった。内題が確認できない場合は他の情報源から採用するが、その情報源を明記するという、NII に則った運用を多くの大学図書館が行っていた。一方で研究者はといえば、書名の情報源として採用（・優先）する箇所として「内題」を挙げる場合と、「外題」を挙げる場合と主張は分かれている。

「内題」を採用する研究者は堀川貴司氏や藤井隆氏、大沼晴暉氏らがいる。しかし、これらの研究者の主張はあくまでも内題を優先とする、というものであり、複数の情報を吟味し決定すべきと論じている。また、NII はアンケート回答でもあったように、巻頭を優先し、それ以外の場合は情報源を注記するとしている。なお、漢籍について長澤規矩也氏は、「原則として巻首題を正式書名とする」としており、京大人文研も同様に巻首題を正式書名としている。

一方で「外題」を採用すると主張されているのは、長友千代治氏や中野三敏氏らである。長友氏は外題と内題で表記が異なる場合を例に「著作者や編者が自分の考えている正式な書名を外題に、本の貌となる表紙に書かずに、内側に書くはずはない」とし、「外題を正式な書名として認知したい。」と述べている(廣庭・長友 1998)。中野氏もやはり「最も人目につきやすいところに現された題名を、

その書名として認定するのがまずは妥当なところかと思われる」と述べている(中野 1995)。ここで面白いのは、長友氏は前述書で「外題を正式な題名として認知しようとする議論が現在は強い」としているが、中野氏は外題(題簽)が剥落しやすく現存する資料において題簽のない資料が存在することを認めたくて「書名は内題によるという内題主義が、現在優位であることは事実」と述べており、研究者によってとらえ方は様々であることがうかがえる。

このような議論があることは、古典籍資料そのものが一筋縄でいかない資料であることを表しているともいえよう。

また、破損・汚損等で内題（特に巻首題）や外題が確認できない資料や、どこにも書名情報が確認できないものについては、その情報源を記したうえで、その他の箇所から採用したり、データベースや『国書総目録』等を確認したり、販売元のカタログを参照するなどの回答が見られた。

なお、研究機関である国文学研究資料館では、資料利用時の利便性のため、独自に「統一書名」を採用している。

では次に「巻数」に関する項目であるが、大学図書館では書名同様 NII に則った運用を行なっている。つまり、巻数を書名に引き続いて記述し、物理的な冊数を VOL フィールドに記述するという方法である。研究者は巻数について、書名ほど詳細に述べてはいないが、巻数と冊数について「完本か、欠本のある不完全本かを知ることは大切である。」と述べている(廣庭・長友 1995)ほか、分冊の資料を例に、丁付が通しであり内題もないものは不分巻と考えるとしている。

巻数調査の注意として、表紙に「上下」「天地」等とあった場合、その資料が上下(天地)2 巻本であるのか、あるいは上中下(天地人)の 3 巻本ではないのか、などの確認が必要になると指摘している。確認の方法としては資料の巻首や目録、版心等で記載されている巻数が複数個所で合致していれば、

巻数を確定することができる。

以上、書名と巻数について各大学図書館の対応と研究者等の主張を確認してきたが、実際の古典籍資料を見ながら、いくつかの事例について、その対応策を確認していきたい。

4. 事例の採取と区分

書名・巻数に関わる、不規則な事例については、毎月の月例会で実施した会員所属館の古典籍資料の調書作成から採取した。2年間の活動の中で、そうした事例を大きく次の5つに区分した。

- ① 内題・外題で表記が異なる
- ② 巻首題がない
- ③ 端本で巻首が不明
- ④ 書名情報が不明
- ⑤ 巻首題と内容が異なる

それでは、これから各事例を見ていきたい。

まず「①内題・外題で表記が異なる」だが、事例として、内題(巻首題)が『和漢音釋書言字考節用集』(写真1)、外題として『和漢合類大節用集』(写真2)と表記が異なっている資料を取り上げる。この事例は研究者の間でも特に議論が分かれているのは見てきたとおりであるが、一方でアンケート回答のとおり多くの大学図書館ではNIIのマニュアルに則り、書名を内題から採用している。今回の場合は、大学図書館としては内題である『和漢音釋書言字考節用集』を採用すればよいと考えた。

「②巻首題がない」資料では、同じ巻首題がない場合でも、(i)上下巻で尾題が異なる資料、(ii)版心題のみ確認できる資料を取り上げる。(i)では上巻「天水抄」(写真3)、下巻で「天水」(写真4)となっている。この場合は、上下巻という資料の構成上の順番通りに、上巻の尾題から『天水抄』とするのがよいと考えた。なお、書誌作成に時間をとれるようであれば、『国書総目録』等も合わせて参照すべきである。ちなみに、この資料を『国書総目録』で確認すると、『天水抄』となっている。(ii)では、版心に「糸屑」(写真5)という表記がみ

られる以外、巻首題や外題・序題・目録題・尾題等、書名となる情報の表記が確認できない資料を取り上げた。この場合は、資料から採用できる情報源は版心のみであるため、書名としては『糸屑』を採用するが、NIIの場合「巻頭以外を情報源とした場合には、注記にその情報源を示す」とあるので、その旨の記載が必要となってくる。ただし、この資料においてもデータベースの確認が必要となってくる。『国書総目録』では『俳諧糸屑』という記載があり、この資料においても確認できなかった情報源にはもともと「俳諧糸屑」の表記があった可能性が推察される。このように資料のみの情報とデータベース等で確認できる情報とは、その結果に食い違いが出てくる場合がある。

「③端本で巻首が不明」の資料は、1冊目がなく巻首を確認できない資料であるが、2冊目(巻三)以降において、外題(写真6)・目録題(写真7)の表記があり、各冊共通している。この場合には、確認できる情報源から『日本居家私用』となる。この場合も、②(ii)と同様にNOTEフィールドにその情報源の記載が必要となる。なお、この資料では確認できる情報源である外題・目録題の表記が同一のため混乱は少ないが、これらの表記が異なる場合、あるいは、巻首以外で残存する情報源が多い場合、どこから採用するかについて考えてみたい。①で取り上げたものはあくまでも内題(巻首題)と外題であったが、③はその内題(巻首題)がないため、判断に迷う可能性がある。このようなときには、漢籍の規則を参考にすることも一つの方法だと考えた。漢籍では、巻首題が残存していない場合、目録題→巻尾題→序跋題→封面(見返)題→版心題→題簽(外題)の順に優先順位をつけ、書名を確定している。

続いて「④書名情報がどこにも見つからない資料」である。取り上げる資料は単冊で、巻首(写真8)・巻尾・序跋・封面・版心・題簽(写真9)と、書名情報が確認できないものである。この場合、書名情報がどこにも見つからない以上、資料の内容

から推定し、目録作成者が簡潔な書名をつけ、NOTE フィールドにその旨を記載する。アンケートでも回答のあったように、購入時の書店目録等も仮題をつける参考となりうる。取り上げた資料は、雑多な形式と内容をもつ遊戯的な点取俳諧が集められているので、そのことを補記し、書名を『雑俳点取帖』とすれば適切であろうと考えた。なお、『国書総目録』を確認すると、「雑俳」や「点取」という単語を含む項目が見受けられたため、どちらも書名情報として適切な単語であることがわかる。このように古典籍の目録作成、特に書名情報が確認できないような資料については、目録の知識のみならず、古典籍資料の内容読解という、決して容易ではない作業や、「雑俳」や「点取」という適切な書名をつけるための用語の知識が必要となってくる。

最後に「⑤巻首題と本文内容が異なる資料」である。取り上げた資料(以下資料 A)は、巻首題(写真 10)が「老子麴齋口義」、外題(写真 11)と序題が「老子經諺解大成」と表記されている。巻首題と外題で表記が異なっているので、これまで同様に巻首題から書名を『老子麴齋口義』として採用すればよいかと思ってしまうが、ここで別資料(以下資料 B)の内容も合わせて比較、検討してみたい。資料 B の巻首題(写真 12)は資料 A と同じ「老子麴齋口義」である。しかしながら本文を追っていくと、資料 B が口義上の第一本文の後、すぐに第二が始まるのに対し(写真 13)、資料 A は第一本文の後に注釈がついており(写真 14)、それぞれの資料が別内容であることがわかる。この資料 A は「老子麴齋口義」に対する諺解書(注釈書)となっており、「老子麴齋口義」そのものでないということがわかる。このように巻首題と本文内容が異なっている点について考えると、巻首題である「老子麴齋口義」を書名として採用することは適切とは言えなくなってくる。今回の資料 A では巻首題以外の外題・序題に書名情報となりうる記載があり、なおかつそちらのほうが本文内容を反映し、書名

として適切であるという場合には、巻首題以外の個所からでも情報源とすべきである。今回はその資料内容から、書名は序題・外題を根拠として「老子諺解大成」とするのが適切であると考え。このように、巻首題に表記されている情報と、本文内容との祖語に気づくには、相応の知識と、本文まで確認する注意深さが必要である。

以上、活動の中で採取された事例を挙げてきたが、古典籍資料にはその他にも対応に悩んでしまうような事例が存在する。例えば、漢籍においてみられる「書名の補正」、内題採用を唱える研究者から指摘される「外題替え」、さらには「別書名」などである。いずれも、2 年間の活動中にそうした事例に当たらなかったこと、また、取り上げるにしても発表時間の関係もあり、詳細に報告することは叶わないが、今後実際に事例として当たったときの、残された課題としたい。

ここまで長く書名について述べてきたが、巻数についても触れておく。ただし、巻数については書名ほど不規則な事例が発生しづらく、多くが書誌の巻数表記と物理的巻数表記が異なる場合に集約されると考えている。例えば、3 冊本で題籤には「上中下」とあるが、巻首は「巻 1～巻 10」と表記されている、巻 1 上・巻 1 下と表記されている、といったものである。とはいえ、アンケート結果からも分かるとおり、多くの大学図書館では NII に則って書誌を作成しているようであるから、巻数について考えられる事例については、和本であれば NII のマニュアル、漢籍であれば京大人文研に準拠すれば問題は少ないと考えている。

5. まとめ

以上、古典籍の書誌作成における不規則な事例の対応策を考えてきたが、ここにまとめておきたい。まず、書名については、多くの大学図書館が内題から採用しているのが現状であり、それによって書名を確定したとしても間違いはない。だが、内題採用はあくまでも「原則」であり、言っ

まえば書誌作成に時間的余裕がない場合、それで十分かもしれないが、いくつかの事例でみたように、けして内題採用ではその資料の適切な書名として確定できないものが存在するのをもまた事実である。そうした点から、なにが何でも書名は内題から採用するということには、躊躇されるのである。こうした事例を鑑みるに、これまで述べた書誌作成の提言は提言として、当初掲げていた、和本の書誌を作成する際の普遍的な規範を定めることには限界があると改めて感じた。

書誌作成者には、資料の内容やその用語の知識が必要であり、また古典籍には種々雑多な資料が存在し、そのひとつひとつの不規則性を予測し基準を定めることは難しく、そこが書誌作成者の頭を悩ませる要因でもあり、逆にそれこそが古典籍の魅力でもあるといえる。

何よりも、古典籍書誌作成における技術・知識は、自分一人で高められるものではなく、悩み、相談し、よりよい書誌作成を目指す人たちと一緒に対応を考え、様々な古典籍資料に触れることによって培われる。このような涵養は、分科会の場で学べるものだとこのことをここに報告する。

6. おわりに

報告大会当日、参加者からいただいたアンケートの中から、いくつか回答したい。

まず「大学図書館へのアンケートに際して、NACSIS-CAT を使用しているか（登録しているか）という項目は質問されましたでしょうか。Nii に準拠しているかどうかの割合が知りたいです。」については、質問項目としては設定していなかった。ただし、アンケート回答において、NII に準拠していると回答いただいたものは、今回の調査対象校では 25%であった。

さらに、「本を直すのは、大変なことで、国内の専門家はのり・紙の材料からつねにさがしています。これを夏に実習としてあつかうのはいかがなものでしょうか。やるなら、専門になれる力をつ

ける。…(略)」とご指摘いただいた。この実習は古典籍資料を扱う図書館職員として、まずは専門業者による説明と実際に補修をしてみるということ念頭に実施した。ご指摘いただいた時期、あるいは実習の成果として業務に還元できるかという点については、現在の大学図書館の事情からすればその通りかもしれないが、作業内容を知っていれば、補修に関する判断が可能となり、より適切な資料保存と管理ができるきっかけになるのではないかと考え、実施している。

参考文献

- 大沼晴暉 2012 『図書大概』 汲古書院
京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター 2005 『漢籍目録：カードのとりかた』 朋友書店
長澤規矩也 1972 『増訂版和漢古書目録法』 一誠堂ほか
長澤規矩也 1974 『図解古書目録法』 汲古書院
中野三敏 1995 『江戸の板本』 岩波書店
廣庭基介、長友千代治 1998 『日本書誌学を学ぶ人のために』 世界思想社
藤井隆 1991 『日本古典書誌学総説』 和泉書院
堀川貴司 2010 『書誌学入門』 勉誠出版

国立情報学研究所「和漢古書に関する取扱い及び解説」

国文学研究資料館「国文学研究資料館 日本古典籍書誌レコード作成要領」

和漢古典籍研究分科会 HP

<http://www.jaspul.org/pre/e-kenkyu/kotenseki/>

図版出典

写真 1～11・14 成城大学図書館所蔵資料

写真 12・13 駒澤大学図書館所蔵資料

※掲載の都合上、図版は縮小しているため、上記分科会 HP にて合わせて確認いただきたい。



写真 1



写真 2

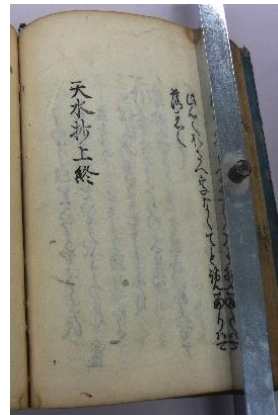


写真 3

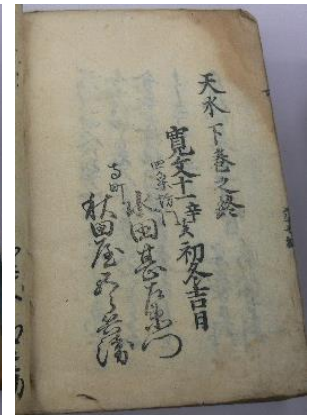


写真 4



写真 5



写真 6



写真 7

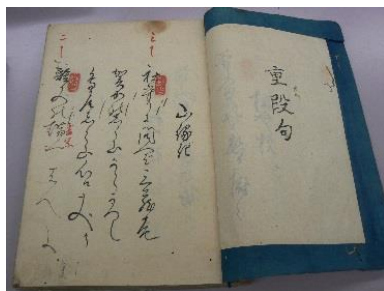


写真 8



写真 9

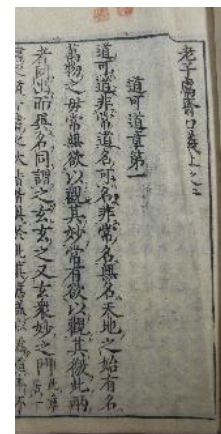


写真 10

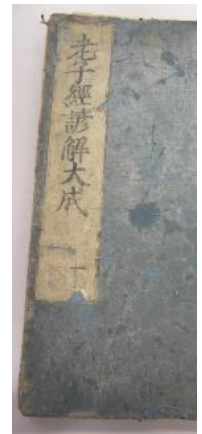


写真 11



写真 12



写真 13



写真 14